

令和 8 年度第 1 回 大分県文化振興県民会議 議事録（主な意見）

令和 8 年 8 月 2 6 日（水）10：00～12：00

大分県庁新館 5 階 5 1 会議室

以下議題を一括で説明ののち、各委員より発言をいただいた。

■議題 1 芸術文化を享受できる機会の充実について

■議題 2 芸術文化の創造性を活かした地域づくりについて

○アートファンと芸術に触れる機会が少ない層とのギャップを埋めるため、支援者が無料招待券を購入し、機会が少ない知り合い等に配布する「未来枠」を県単位の制度として拡充することを提案。また、芸術の実践者や市民と芸術に携わる者を繋ぐ中間支援人材が各地に点在していることから、広域連携を推進しリソースやノウハウを共有する機会づくりが必要。

○広報強化策としてイベント情報の早期共有や、県による医療機関の掲示板・ケーブルテレビの活用を提案。また、プロとアマの協働や健康づくりと芸術鑑賞を組み合わせた「健康×芸術モデル」など多様な分野を巻き込むコラボレーションの重要性を指摘。さらに、既存の団体やイベントを少しアレンジし、新たなポテンシャルを引き出す工夫が必要。

○県立美術館の入場者数 82 万人達成を、新たなファンの拡大に直結する素晴らしい成果であると評価。大規模イベントの成功により外部からの注目度が高まっていることを踏まえ、今後も集客の柱となる目玉イベントを継続的に実施していく必要性を指摘。あわせて、民間が安心して共催に参画できるよう、基幹イベントに対する県の継続的な予算確保を要望。

○イベント的な企画に偏らず、美術館・博物館ならではの「本物の作品を実際に見て感じる」リアルな体験を子どもたちに積ませる場を大切にしてほしいと主張。同時に、地方であっても VR などの最先端デジタル技術を積極的に導入し、新たな鑑賞体験を展開していくべきだと提案。また、多くの人が平等に美術館へ足を運べる環境づくりが必要。

○学校公演のように一律で鑑賞させられるのではなく、「回遊式で自分で選んで体験できるイベント」の仕組みが優れていると紹介。こうした参加者が主体的に動いて時間差で多様な芸術に触れられる仕組みは、子どもたちの主体的な学びや芸術への接触において非常に効果的であり、今後の企画の参考にするよう提案。

○今後も若者や県外客の取り込みに向けた魅力的な企画を進めるべきだと発言。また、文化キャラバンについて、周知徹底による派遣先の拡大や地域連携が必要。さらに、中高校生の職業体験の受け入れ継続、研修室等の利用に関する周知徹底、長期休暇中における小中学

生向けの無料招待券配布の仕組みづくりなど、若年層の芸術体験を増やす具体的な取り組みを提案。

○学校現場は既存活動で手一杯であるため、今後は新規行事を増やすのではなく既存活動にイベントを紐づける発想へのシフトが必要だと指摘。5年後の全国高等学校総合文化祭に向け、県全体のムードづくりや煩雑な手続きの簡略化・支援を要望。また、文化キャラバンの実施時期を固定して年間計画に組み込めるようにすることで、現場の負担軽減と継続的な実施を提案。

○ライト層を巻き込む新たな「フック」として、夜間の屋外でのフィルムコンサートやキッチンカーの誘致など、気軽に人が集まる場づくりの活用を提案。また、人材育成の観点から、舞台裏の仕組みや専門職の仕事を子供たちが実際に体験できる「芸術版キッザニア(バックヤード・スタッフ体験)」の実施を提案し、「支える側」の仕事の面白さに触れさせる重要性を指摘。

○美術館における専門的展示と一般向け展示のバランスを取ることや、駅から美術館への誘導演出、夜間の広場活用による回遊性向上を提案。インバウンド対策としては、アニメコンテンツの活用や国宝のPR強化を要望。

○芸術に縁遠い大人に足を運んでもらうことのハードルの高さを指摘し、大人の動員以上に未来を担う子どもたちに本物の文化に触れる機会を作ることが重要であると主張。その上で、現在美術館で行われている幼稚園・小学生向けの案内プログラム「びじゅつかんの旅」などは素晴らしい取り組みであるとし、ぜひ今後も継続してほしいと強く要望。

○観光やインバウンドも視野に入れた芸術文化振興事業の継続を求めるとともに、大分市中心部だけでなく各地域の子供たちが芸術文化に触れる機会をしっかりと提供してほしいと要望。さらに、担い手不足により地域の伝統行事が消滅している現状に強い懸念を示し、将来に向けて映像等でしっかりと記録・保存するアーカイブの仕組みづくりを提案。

○Uターンなどのきっかけを作るためにもアーカイブの蓄積が重要であると述べました。その上で、多くの人が集まる大規模施策だけでなく、地方の深刻な現状にも幅広く目を向け、伝統文化を守る方針を県として大切にしてほしいと要望。